随想　日本という国は…

㈱ＰＰＱＣ研究所　加藤　宏光

先日久し振りに京都へ出掛けた。コロナ騒動で心ならずも無沙汰をしてしまった義父母の墓参を兼ねて、恒例の京都詣でである。

復路の新幹線で座席に設置されていた《Wedge十二月号》をパラパラとめくり読みをしていた。ブックレビュー（八九ページ）を流し読みして、ハッとさせられた。紹介されている書物は《山本七平による『一下級将校の見た帝国陸軍』》という。

実は、この紹介文を見てすぐに、この書物をネットで購入し、急ぎ読み下したのであるが、内容のあまりに情けなく、絶望的であることから、現物書物における本文の詳述や印象を語るのはあえてよすことにする（情けなくなってしまうから…）。代わりにWedgeの紹介記事を基に、著者の私見（印象を含めた）を述べる。

もっともこの本に何が書かれているのかにまったく触れないでは、私見も印象もない。そこで、当該書物に関する記事を引用し、また内容を一部紹介することにしよう（この紹介文を書いているのは、筒井清忠氏、帝京大学文学部長で東京財団政策研究所主席研究員。専門は日本近現代史）。筒井氏いわく…。

この書物は過去の戦争のことを書いているはずなのに、読んでいると、現代日本のことを書いているとしか思えなくなってくる恐ろしい書物である。言い換えると、太平洋戦争の組織・個人のあり方をめぐる書物は戦後数多く書かれてきたが、その最高峰に位置するのが、現代にもそのまま当てはまる分析を行ったこの作品なのである。

日本軍とはどのような組織であったのか。それは「員数主義」によって成り立っていた組織であったと山本はいう。―中略―「紛失しました」という言葉は日本軍にはない。この言葉を口にした瞬間「バカヤロー、員数をつけてこい」という言葉がビンタとともにはね返ってくる。紛失すれば「員数をつけてくる」すなわち盗んでくるのである。

こういう組織が始めたのが太平洋戦争で、山本（七平）はフィリピン・ルソン島に砲兵隊本部の少尉として赴いた。―中略―フィリピンのネグロス島は、日本軍が航空要塞を作っており、米軍が手痛い被害を被るであろうと多数の日本兵たちが信じていた島だが、「どんな物かと思ったら」「毎日の爆撃で穴だらけの飛行場群に焼け残りの飛行機が若干やぶかげに隠されているだけ」だった。「なぜこうなったのか。それは自転する〝組織〟の上に乗った不可能命令とそれに対する員数報告で構成される

虚構の世界を『事実』としたからである。日本軍は米軍に敗れたのではない。米軍という現実の打撃にこの虚構を吹き飛ばされて降伏したのである」

すなわち、陸軍という七〇年近い組織は、すべてが規則ずくめで定型化して完結しており―中略―数さえ合っていれば内実は問わない徹底した員数主義の世界であり、不可能な命令とそれに対する員数報告で構成されるそうした虚構の世界は自滅して行くしかなかったのである。（以上Wedgeの筒井氏の記事を引用）

筒井氏は《太平洋戦争と日本軍》について知ることを前提としてこの記事を掲載している。しかし、著者には七〇年以上前の事実を歴史として理解するだけでは止まらない何かを感じた。日本というこの国が持つ、曖昧だが根本にある欠点を突いているように思ったのである。

新型コロナ騒動を例にとってみよう。この問題も、その初めから今に至るまでに政府（社会の指導者たち）のとり続けているそれぞれの対応には、一貫した定見が感じられず、その場しのぎの思い付きとも思える処理・処置で終始している（それは今も続いているのであるが…）。混乱を深めるもので、感染病への対処・対応を日常とする著者にとっては歯がゆいレベルを超え、イライラし続けたものである（これも今も続いている）。

たとえば、一昨年安倍内閣の下に首相の方針を主体としてこの感染症を《指定感染症－三類》と定めた。このことにより、感染者は軽症もしくは無発症であってもウイルス検査の結果陽性と判定されたすべてを入院させる責任ができた。これが、そもそもわが国の医療崩壊の第一原因と著者は理解している。

世界で最も病院数の多いわが国で、なぜ医療崩壊が発生するのか？

システム思考ができていない証左といえよう。

行政措置の結果できた、すべてを入院させる責任、それにもかかわらず、無為のため発生した医療崩壊事態への対策として制度《自宅隔離》の指示は、ある意味員数合わせの結果といえる一例であろう。

この矛盾は憲法に定める《個人が等しく保有する、健康な生活を維持する権利》に違反する憲法違反ともとれるがその現実には目を背け、少数しか反論者がいないことを前提としたものか、慣れによってクリアしてしまった。わが国では世界のその他の国々に比較して新型コロナ感染者数が著しく減数している。これをもって《結果オーライ》としてはなるまい。

小室圭氏と眞子氏の騒動にしても《皇室の持つ責任とそれに基づく特異な位置付け》と《個人の人権》に関する基本的問題には公には触れることを避け（ているように感じられる）、何となく誤魔化しながら、何とか終わらせようと宮内庁が画策していたように感じていたのは著者だけであろうか?!

責任を曖昧にしたままで権力を発揮しようということが、今も昔も日本の曖昧さの根本問題で、員数合わせという感覚の根っこには《トップの無責任性》があるのではないか。

この国で人生を掛けて責任を取っているのは、中小企業の社長だけなのだろうか？　そんな絶望的な気分にさせられるのが《山本七平著・『一下級将校の見た帝国陸軍』》という書物であった。